「小松清とヴェトナム：日本の仏印進駐期「文化工作」とその余波：木下杢太郎のヴェトナム訪問（1941年5月）から小松清のヴェトナム退去（1946年6月）」
Proceedings of Japanese Studies in Southeast Asia: Past, Present, Future, Vietnam Academy of Social Sciences, Hanoi, Vietnam, October 22-23, 2009, pp.25 - 42

小松清とヴェトナム：日本の仏印進駐期「文化工作」とその余波
木下杢太郎のヴェトナム訪問（1941 年 5 月）から 小松清のヴェトナム退去（1946 年 6 月）まで

Shigemi INAGA
International Research Center for Japanese Studies

1. 仏諜報記録に残る小松清

国際日本文化研究センターに 1997 年に客員として滞在された、カナダ・アルバータ大学教授のヴィン・シンさんから、ある日「小松清」について質問を受けた。一瞬誰のことかと戸惑ったが、1920 年代パリに滞在して、というあたりで記憶が蘇ってきた。ヴィン・シンさんが手にしていたのは、1921 年 12 月 26 日、パリ発信の機密書類の写し。発信源は Service central de renseignement du CGI par la Direction de la sûreté générale であり、宛て先は GGIC gouvernement général de l'Indocine。内容は Kiyoshi Komatsu 小松清が Nguen Ai Quoc に宛てた手紙の写し。小松が 1921 年 12 月 13 日付けで書いた書簡が、秘密警察によって開封されていた、ということになる。ヴィン・シンさんから、フランス語の内容を要約してほしいといわれて読んでみると、添付された調査記録には Sakamoto, Kojima,Hazama などという日本名がある。これには質問された当方がびっくりした。まず、その文面を以下にかいつまんでご紹介する。

No3802 Paris le 13 déc. 1921 (Contrôle général des Indochinois en France)

Kiyoshi Komatsu qui a fait l'objet d'une communication du ministère des colonies en date du 5 dec. 1921, au sujet d'une lettre qu'il écrivait le 19 novembre dernier à l'agitateur Nguyen Ai Quoc, est né le 13 juin 1900 à Kobe, Japon, de Staro (sic) Komatsu et de Tamura Kini (sic), tous deux résident à Kobe.

Komatsu est arrivé en France par Marseille, le 17 sept. dernier. Il était titulaire d'un passeport jpn no.503562 dérivée à Kobe le 22 juin 1921, et visé à notre consulat dans cette ville le 23 juillet suivant.

Komatsu qui est venu en France pour apprendre notre langue qu'il ignorait complètement et pour faire des études de littérature, s'est immédiatement rendu chez un de ses compatriotes, m. Sakamoto, artiste, peintre. Celui-ci occupe provisoirement l'appartement dont est locataire

à cette adresse, un autre compatriote M. Kojima, peintre assez connu dans certains milieux, d'artistes, qui est actuellement retourné au jpn pour qqs mois.
Komatsu après qqs semaines de l'hospitalité que lui offre Sakamoto a loué dans le même immeuble un petit chambre meublé où il est demeuré jusqu'au 4 dec. Dernier, date à laquelle il est parti, pour Nice avec deux de ses compatriotes, MM. Nogara et Inosuke Hazama, lequel demeuraient à Paris le 17 rue Sommerard. Tous trois en quittant leur domicile ont manifesté leur intention de revenir à Paris dès le printemps. On ne connaît pas encore leur adresse dans cette ville, mais, le cas échéant, il serait facile de l'obtenir, les intéressées devant la communiquer à leur ancien logeurs pour la réexpédition de leur courrier.（以下略）

(le 13 dec. 1921)

坂本繁二郎、児島虎次郎、それに硲伊之助。児島は当時帰国中だが、坂本や硲、さらに林倭衛、小出楢重は、いずれも当時パリに滞在していた画家たちで、渡欧のおりに同船のクライスト丸で知りあった仲間とその友人たちである。硲の住所として記載されたソムラール街 17 番地という地名は、パンテオンの岡からセーヌ川に下る坂道の途中、サン・ジェルマン大通りと交差する手前であり、当時日本人滞在者たちが入れ替わり立ち代り宿にしていた場所だった。この機密文書によれば、小松には当時、日本の諜報機関のエイジェントの嫌疑がかけられていた。開封された手紙のなかで小松は、ヴィエトナムの革命家であり、当時パリでフランス共産党の活動に参加していた「扇動家」、グエン・アイコク Nguyen Ai Quoc に対して、共産党の入党証の入手を頼んでいる。その部分の報告は以下のとおり。

(…) Komatsu travaillait beaucoup chez lui pour apprendre notre langue et en deux mois avait fait des progrès surprenant. (…) Il ne serait pas impossible que Komatsu fut un agent de renseignement de l'ambassade japonaise et cela expliquerait pourquoi il était en relations avec Nguen Ai Quoc et pourquoi il lui demandait de lui faire obtenir une carte de communiste.

ここには、小松は日本大使館の諜報員ではないか、とする推測が綴られている。それ故小松は、グエン・アイコクに共産党の入党証を依頼したのではないか、というわけだ。この嫌疑は、現在の知識に照らせば根拠薄弱。諜報機関が開封のうえ転

写した、小松清のグエン・アイコクあての書簡の文面は、関連する部分のみを拾うと、以下のとおりである。

Le 19 nov. 1921 le 18 rue Ernest Cresson, 14 ème
Mon Cher comarade (sic) Nguyen Ai Quoc, (…)
Mon cher comarade (sic), je vous prie de me dire le plus tôt possible de quelle manière je puis me procurer une carte de communiste et dès que j'aurais l'obtenue je partirai pour le Midi, Nice ou Cannes, où il y a le « parti communiste. » (…)

まだパリについて 2 ヶ月ほどの時期だが、文面のフランス語はきわめて達者であり、こまかな綴り間違いは残るものの、かなり複雑な内容まで確実に文章で意思伝達できる水準に達している。上に引用した当局側の記載には「まったくフランス語を知らずに入国した」小松が「二ヶ月で驚くべき進歩を遂げた」との論評がある。とすれば治安当局は、これ以前から小松の身辺の動向を調べ、手紙類も開封していたことになる[1]。

2. 1947 年インドシナにおける小松清情報

この小松清は、それから 25 年後の 1946 年に、ハノイでホー・チミンに会見することになる。それにいたる経緯も、1947 年 1 月 23 日付けのハノイ発信のフランス側諜報記録から拾ってみよう。

Komatsu, homme de lettre japonais, paraît être introduit auprès des milieux intellectuels français. Il se targue notamment de l'amitié de M. André MALRAUX, dont il semble avoir adopté l'attitude politique de la ''Condition Humaine'', de M. André GIDE et même de M. Georges BIDAULT qu'il aurait rencontré avant-guerre. A quitté à l'heure actuelle l'Indochine et aurait regagné le Japon.
Ils auraient tout d'abord mis sur pied une association secrète, tendance communiste, comprenant des agents de la KEMPEITAI, des commerçants et des civils japonais, et destinée aux fins suivantes:
-Aide militaire et politique aux nationalistes.

[1] d 20, notes de la sûreté, carton 364, SPCE, CAOM

-Contacts avec les premiers agents chinois au Tonkin, et désireux de soutenir le Mouvement Viet-Minh anti-français.
-Trafic d'armes et de matériels au profit du Vient-Minh en liaison avec les Chinois et certains membres de la 1ère mission américaine HANOI (Major PATTI par exemple, condamné par la suite aux USA pour ses agissements HANOI).[2]

抄訳を付けておこう。「コマツ、日本の文人、フランス知識人界に浸透している様子で、とりわけアンドレ・マルローAndré Malraux 氏との交友を鼻に掛け、その『人間の条件』に見られる政治態度を採用した模様。アンドレ・ジッド André Gide 氏や、ジョルジュ・ビド Georges Bidault 氏らとも戦前に会った模様。現時点でインドシナを離れ日本に戻ったものと見られる。当初共産主義の傾向ある秘密結社を発足した様子。これにはケンペイタイのスパイ、日本の商人や一般市民も含まれ、以下の目的をもった。①民族主義者への軍事的・政治的援助。②トンキンに到着した最初の中国エイジェントとの接触し、抗仏ヴェトミン支援を意図。③中国人および一部のアメリカ初期派遣団と結託したヴェトミンへの武器および物資の違法供与（例として、その後 USA でその陰謀ゆえに有罪となった Major Patti）。」[3]

マルローの『人間の条件』は小松と新庄嘉章との共訳により『上海の嵐』という題で 1938 年に刊行された。A. マクドナルドの英訳の題名を借りたもので、改造社から出版された。1927 年の上海動乱を背景に、蒋介石の弾圧に抵抗する革命家たちの悲劇を描いた小説だが、「蒋介石が共産党との提携を破棄して覇権へと上り詰める道程を描いた劇的小説」とカモフラージュしたことで発禁を免れた、という。[4] それでも削除箇所は 140 以上にのぼり、4 百字原稿用紙 4 枚に及ぶ、長大な伏せ字部分もみられ、小松はマルローに宛て、出版できたことそのものが「奇跡に近い」と報告している。この小説の主人公、フランス人の父と日本人の母をもつハーフとして造形されたキヨ・ジゾールが、マルローを 1931 年に日本に招いた小松清をモデル

[2] 'Les Japonais en Indochine depuis le 15 août 1945' Notice technique de contre ingérence politique, no.635/238é239.5.2./BA.L/00.002/SD, Paris, le 23.1.47, dos. 1249, Carton 138-139, Indochine, Nouveaux Fonds, AOM
[3] Notice technique de contre-intelligence politique, No.635/238./239.5.2/BA.L/00.002/SD, Paris, le 23.1.47, dos.1249, Carton 138-139, Indochine, Nouveaux Fonds AOM.なお文末にみえる Patti 側からの証言は、Archimedes L..A. Patti, *Why Viet Nam ? Prelude to American Albatross*, University of California Press, 198, p.304 sq.ほかを参照されたい。
[4] 林俊・クロード・ピショワ『小松清　ヒューマニストの肖像』白亜書房、1999, 198 頁。以下、伝記的事実は、このきわめて充実した評伝に負うところが多い。

として、またカマ画伯が近藤浩一路に仮託されていることは、よく知られている。国民党右派の裏切りに対して自決を遂げるキヨの最期は、贖罪の犠牲という典型を踏まえるが、ここには道義を貫いての切腹、という行為にたいするマルローの理解も反映している。ハラキリといえば男女の心中を連想させた当時にあって、マルローのこの解釈は、自裁の倫理的側面を強調し、日本の武士道にあたる倫理が中国にはないことを示唆し、両者の異質性を浮かび上がらせようと意図したものだった。広東や天津で組合を組織しようとして、港湾労働者の群れに身を投じるキヨに、実物の小松清の滞仏時代が投影されていたことを見るのは、たやすい。

1933 年末に『人間の条件』はゴンクール賞を受賞し、弱冠 30 歳にしてマルローはフランス文壇に席捲する。34 年 7 月に「アンドレ・マルロオと行動の文学」を『セルパン』に掲載する清は 35 年 10 月の「行動主義の防衛」において「行動主義」を「文学者の節操」の問題と捉え、36 年の「アンドレ・マルロオと僕」では、この行動主義の文学の「源泉がマルロオの思想と文学にあった」ことを確認する。行動主義のお手本は、スペイン内戦に参加して共和国軍側につき、フランコに対抗したマルローにあった。盧溝橋事件、人民戦線事件、国家総動員法の発令と、周囲の環境が急速に悪化するなか、小松清は 37 年に 6 年ぶりに欧州へと「脱出」する。かれはスペイン行きを希望し、マルローが斡旋に力を尽くすが、果たせない。フランコを承認した日本の国籍を有する者は共和国として入国を許可しがたい、との当局の判断で、小松の希望は叶えられることなく終った。スペイン共和国の背後にモスクワの意思が控えており、「人民戦線という看板の裏にはコミュニスト独裁」が居座って、「スペインを蝕み」つつあることに、小松はいやおうなく気づかされる。[5] その小松清にとって、結果的にみれば、スペインに代わる土地となったのが、ヴェトナムだった。

ドイツ軍のパリ進撃につづく陥落にともない、小松はフランスを脱出し、リスボン経由で 1940 年 9 月 2 日に神戸に帰着する。だが彼を迎えたのは、家族ではなく、特高だった、という。帰路のシンガポールで英字新聞 *Straight Times* の取材に応じ、ドイツ軍のロンドン空襲への意見を聞かれ、ドイツのイギリス上陸作戦は無理だと語ったところ、Japanese Writer who admires British という見出しを付けられた。このために、特高から利敵行為をなす要注意人物として目を付けられた、という事

[5] 引用は「イタリア筆禍事件」『進路』1961 年 4 月、21 頁より。

情らしい。この時期の小松清の人間関係は、1941 年 12 月 8 日の対米戦争勃発時点で小松が逮捕され、累の及ぶことを懸念した彼が、留守をまもる妻に関連資料の焼却を指示したこともあり、詳細はつかみ難い。坂本直道、来栖三郎らと地下組織をもち、反・主戦論の非合法活動に従事していた形跡は濃厚だが、松岡洋右などとの繋がりなど、その実相を復元することは、もはや容易ではない。いずれにせよ、改造社の山本実彦との関係は明らであり、その伝もあって小松は、改造社特派員という身分で、1941 年 4 月 19 日、ラプラタ丸で神戸よりインドシナに旅立つ。

3. 第 1 次インドシナ滞在

小松は 1940 年 5 月 1 日にハイフォンに到着する。この最初のインドシナ滞在での「南方文化工作」において小松がもっとも親しくつきあったのは、パリ時代の画家仲間であった、リュ・ヴァン・タイ劉文泰。小松の『仏印への途』(昭和 16 年[6])には、Ｌとして登場する。父はグエン・ヴァン・ビン阮文永。故郷に戻っていた息子は、父の急逝ののち絵筆を絶ち、父の文業を継いで、阮江グエン・ジャンの名で詩作をなしていた。44 年には小松清がフランス語で執筆した小説『邂合』をヴェトナム語に訳すことになる。これはヴィン・シン教授によって再発見され、近年、復刊がなされている[7]。さらに小松がなしとげた事業には『金雲翹』キン・ヴァン・キョウの日本語への翻訳があげられる。阮攸 Nguen Du（1765−1821)によるこの作品は、「安南文学の最高峰をなすと言はれる長叙情詩」であったが、小松は「かうした重要な歴史的オニュメントの存在を、わが仏印研究者が殆ど看過してきたことは、何と言つても遺憾である」と訳出の動機を述べる[8]。漢文ではなくチュノムによって執筆されたこの作品は、ヴェトナムの国民意識に訴える性格を宿している。だが時局柄、これを日本語で訳出するためには「東亜共栄圏に於ける一つの大きな文化遺産」[9]とみなす性格付けが必要だった。小松はこの作品の存在を劉文泰から知らされた。劉文泰の父、阮文永は、この時点ですでに没しているが、当時のハノイの文壇にお

---

[6] 小松清『仏印への途』六興商会出版部、昭和 16 年 12 月 13 日発行、 p.122-23.
[7] Vinh Shin, “Komatsu Kiyoshi and French Indochina,” *Mousson,* 3, 2001, pp.57-86, note 52. 本論文は小松とヴェトナムとの関係に関する信頼できる基本的文献。高杉忠明・松井敬による日本語訳は「小松清　ベトナム独立への見果てぬ夢」『世界』2005 年 4 月 pp.275-285, 5 月、pp.264-282 に掲載。本稿はこの論文作成をお手伝いした際の余滴である。
[8] 同上「「金雲翹」について」p. 157.
[9] 同上、p.163.

いて大きな影響力を発揮した詩人であり、『新安南』『現代思想』などの文芸雑誌編集者としても著名だった。『金雲翹』には彼によるフランス語訳が知られていた。現地ハノイでこの翻訳に接した小松は、帰国後、ルネ・クレイサック訳も参照して、この作品を、韻文ではなく散文で、日本語に重訳により訳出した。日米戦争勃発にともなう収監から出所して後の 1942 年 10 月の刊行だが、献辞には「松岡洋右先生に捧ぐ」とある[10]。日本の国際連盟脱退の立役者だったこの叩き上げ外交官と小松とには何らかの関係があったらしいことを、ここで伏線として触れておく。

1941 年 7 月に帰国した小松は、東京在住のヴェトナム人によるヴェトナム民族解放組織とも関係を深める。そのリーダーが越南復国同盟会会長、クオン・デ疆柢、グエン王朝の皇太子である。1887 年に祖国がフランスの保護領に入るや地下活動にはいり、1906 年妻子を国に残して 26 歳で来日した。小松がクオン・デと接触をもったのは対米戦争の始まる 2，3 ヶ月前の 1941 年初秋だったという。日本敗戦後の 1955 年に小松は『ヴェトナム』を上梓する[11]。これは、ついに帰国の夢を果たすことなく、1951 年に異郷の日本で生涯を閉じたクオン・デの伝記の体裁を取りつつ、この失意の王族と著者との交渉を物語る書物である。それによれば、小松がヴェトナムより戻った当時、クオン・デ疆柢は世田谷区松原町 2-502 に居を据えていたが、孤立を深めていた。霞ヶ関では、日仏間の妥協が対仏領インドシナ外交の基調となったため、もはやクオン・デ疆柢の名を口にすることも憚られる有様だった、という。わずかに大アジア主義を唱える松井石根や大川周明のような右翼が支持していたばかりであり、外務省では、太平洋戦争になってから全権公使としてサイゴンに着任した田代重徳(シゲノリ)、サイゴン駐在の蓑田(ミノダ)総領事、三輪領事、飯田副領事などが、亡命した王位継承資格者の例外的な理解者であったと、小松は回想する[12]。

---

[10] 阮攸 Nguyen-Du 作、小松清訳『金雲翹　Kim Van Kiéou』昭和 23 年再刊、偕光社。この戦後版には「原田俊明君の霊前にささぐ」との献辞が置かれている。原田は大川周明の師弟であり、1945 年 3 月 9 日事変後、越盟同盟への説得工作中、北部・大原付近でグエン・チエン・ジェムらとともに落命した。後述の小牧近江の『ある現代史』にも言及がある。

[11] 小松清『ヴェトナム』新潮社、昭和 30 年。

[12] 小松清の『ヴェトナム』には、小松が東京の自宅で、東京を訪れたグオ・ディン・ディエム、南ヴィェトナム首相、その兄にあたるグオ・ディン・チュク司教とともに、クオン・デン・デ侯 Cường Để 疆柢 (阮福單) (1882－1951)と会合を持った際の写真が口絵に取られており、「一九五〇年八月、東京にて」とある。もっとも晩年の小松はゴ・ディンデェムによる南ヴェトナム

4. 対仏領インドシナ文化事業

小松のインドシナからの帰国に前後する時期から、日本はいわゆる対仏印文化工作に本格的に着手する。派遣事業に限定して、以下にその概要を纏めておこう。まず、第 1 回教授交換派遣が、国際文化振興会(KBS)によって企画される。国際文化振興会は、発足当初は外務省の管轄であったが、1940 年 12 月には内閣情報局第 3 部「対外宣伝」に移管されている[13]。この事業の一環として、まず 1941 年 5 月 5 日から 7 月 13 日の日程で、医学博士、太田正雄こと、文筆家、木下杢太郎 Ohta Masao, alias Kinoshita Mokutarô（1885-1945)が派遣された。当時、皮膚病の大家として知られるとともに、東西交流に関する文化史的教養をもち、フランス滞在の経験もあった太田は、ハノイでは医科大学、インドシナ医学会、フランス極東学院(EFEO)を視察した。現地では「16 世紀の日本について」、「ヨーロッパとの文化交渉」などの演題でフランス語による公開講演をこなし、ついでユエ、プノンペン、サイゴンを訪れている。フランス側は、この医学分野での学術交流については、1943 年 4 月 14 日より 6 月 2 日に、河内医科大学長アンリ・ガリヤールが日本派遣されることで、ようやく 2 年後に答礼を果たしている[14]。その緩慢な日程からも、日本の仏印進駐後、ヴィシー政権下の仏印との学術交流の実態が、円滑からはほど遠いものだったことが窺える。

太田博士の派遣に続き、仏印巡回現代日本画展覧会が開催される。ハノイでは 1941 年 10 月 21 日より 11 月 01 日、ついでハイフォン、フエ、サイゴンと経由してプノンペンにまで巡回する予定だったが、プノンペンでの展覧は、おりからの対米戦争勃発にともない中止となっている。随行員に抜擢されたのは、長期にわたるフランス滞在経験のある、洋画家、藤田嗣治 Foujita Tsuguharu（1886-1968)だった。藤田は「仏印と日本美術」を国際文化振興会の『国際文化』1942 年、18 号に「仏印巡回展本会派遣使節報告」[15]という名目で綴っており、河内大学ほかで講演会をなし

政権の腐敗にはもはや希望を抱いておらず、その崩壊を予見していたという。参照、那須国男「大東亜共栄圏下のベトナム」『思想の科学』1963 年 12 月号、p.49.

[13] 高橋力丸「思想戦としての国際文化交流―戦前の国際文化振興会の活動を巡って」『社会科学研究科紀要』早稲田大学大学院・社会科学研究科、1998 年、別冊第 2 号、pp.95-115. 柴崎厚士『近代日本と国際文化交流:国際文化振興会の創設と展開』有信堂、1999.

[14] 「日仏印第 2 回交換教授　アンリ・ガリヤール博士来朝」『国際文化』第 26 号 p.82.

[15]藤田嗣治「仏印と日本美術－仏印巡回展本会派遣使節報告」『国際文化』、国際文化振興会 1942 年、18 号、pp.73-77. なお後出の小牧近江『ある現代史』の口絵にはパリ・ザッキンのアトリエにて、藤田嗣治、小牧近江、ザッキンが一緒に撮った写真(1919)が収録されている。藤田と

「文化親善交換」に貢献し「日本南進宣伝」の実を揚げるために「微力ながら大任を果たした」とある。実際、フランス語に著しく堪能であるばかりか、すでにパリでも名声を得ており、社交術にもマメで抜かりない藤田を措いて、この任務に耐える人材を見いだすことは容易ではなかっただろう。日本画の展覧会に洋画家の藤田が駆り出されることの不具合や、同一寸法の比較的小品ばかりが並びメリハリに欠けたことには、藤田自身も苦言を呈していた。小松清も「仏印美術の現状と我が文化工作」を『画論』1941 年 12 月に発表し、啓蒙目的の展覧会ならば、売り絵の羅列のような巡業ではなく、本格的な大作も含めるべきこと、さらに日本画だけでなくフランスの影響を受けた洋画をも紹介する必要がある、と発言している[16]。実際には 1941 年 11 月 25 日より 12 月 4 日までの日程で、「日仏印親善洋画展」がハノイで開催されたが、こちらは日本印度支那協会という別組織による企画立案であり、巡回展との連携は図れなかったという[17]。国際文化振興会の行事では、仏印現代美術展覧会が東京・日本橋三越百貨店で 1943 年 6 月 2－6 日の日程で開催された。交換事業と銘打っているが、実際に主導権を握ったのは日本側で、主催者側発表によれば、5 日間の日程で 2 万人近い入場者があったといわれる。ここには、グエン・ヴァン・テイ Nguyen Van Ty、グエン・ナム・ソン Nam Son、ルオン・スアン・ニー Luong Xuan Nhi の 3 名の画家がインドシナより派遣された[18]。

第 3 に言及しておく必要があるのは、考古学の分野での交換事業だろう。ここではまずハノイ極東学院のヴィクトール・ゴルベフ Victor Goloubew（1879−1945）が、太田正雄とあい前後する 1941 年 5 月 11 日から 7 月 5 日の日程で来日している。これへの返礼のかたちとして、日本からの第 2 回教授交換派遣では、京都大学教授の梅原末治 Umehara Sueji（1893−1983）が 1942 年 12 月 11 日よりインドシナに派遣され、以下のような多くの講演をこなしている。「考古学より観たる日本史前の文化」「日本の青銅器」「朝鮮に於ける漢代遺跡の調査と其の業績」「朝鮮上代遺跡の調

小松清との関係も推測されるところだが、藤田のインドシナ派遣時期には小松は日本帰国中であり、両者は現地では出会っていない。なお林洋子「パリ・東京・仏領インドシナ　親仏派日本人美術家の系譜」『京都造形芸術大学紀要』第 13 号、2009 年 10 月、pp.40-47 に藤田の旅券書き込みを用いた旅程の再構成が見られる。

16 小松清「仏印美術の現状と我が文化工作」『画論』1941 年 12 月.

17 桑原規子「国際文化振興会主催「仏印巡回現代日本画展覧会」にみる戦時期文化工作」『聖徳大学言語文化研究所論叢』2008 年、15 号、pp.229－262。後小路雅弘「ベトナム美術「近代」－東アジア的視点から」『ベトナム近代絵画展』福岡アジア美術館ほか 2006`.pp.15-22.

18 「東京」に於ける仏印現代美術展報告」『国際文化』第 26 号、p.81.

査、特に高句麗の壁画について」（ハノイ、12 月 22 日）「南満洲特に関東洲の史前文物に関する新見解」「河南省彰徳府外殷墟殷墓の発掘」「支那古代の絹織物に就いて」「支那古代の絹織物に就いて」「最近日本学者の行ふた支那の考古学調査について」（フエ、1 月 20 日）。その多くは梅原自らが参加した発掘記録であり、結局、敗戦後になって『東洋考古学概論』(1947)として公刊される[19]。梅原ははやくから青銅器に興味を抱いていたが、清化省、ドンソン Dong Son 遺跡での銅鼓にはとりわけ異様な関心を示したとされる。こうした考古学上の学術交換の延長上で、美術品交換が立案された。フランス極東学院側からは「71 点、８トン、23 箱」におよぶ遺品が将来され、上野の帝室博物館では「クメール美術を一望」できる「仏印の国宝級美術品」の展覧（『朝日新聞』1941 年 11 月 29 日の記事の見出し）が開催された。日本側からも交換品が発送されたことになっているが、目録記録なども不明確であり、その行方は杳として知れない[20]。

5. 第 2 次インドシナ滞在の背景

日米開戦にともなって、危険人物として収監された小松清が、出獄後、再度インドシナへと渡ったのは 1943 年 4 月。名目は、田代重徳(シゲノリ)公使の「個人秘書」という資格でサイゴン入りしたものだったという。ついて 1944 年 6 月には、田代・特命全権大使としてハノイ着任に「随行」し、日本文化会館「顧問」に着任している。当時のハノイ在仏印日本文化会館館長は横山正幸、Jean-Marie Yokoyama としてフランス名で知られる人物だった。さらに同館主事には近江谷駒こと、筆名・小牧近江(1894−1965)。「種撒く人」や「クラルテ」運動で知られる人物だが、Le père Omiya の愛称で知られるフランス通であり、インドシナ産業という鉱山会社の要員として、現地では重きをなす見識ある人物だった。

横山正幸は「日仏印文化交換に就て」と題する講演を昭和 18(1943)年 7 月 3 日、東京の日仏会館で行っている[21]。酒におぼれ、街頭で騒動を起こす「一部在留邦人の蛮的行為」に遺憾の意を表明するとともに、たかだか 4 万人のフランス人が 2 千 4

---

[19] 梅原末治『東洋考古学概論』星野書店、昭和 22 年。
[20] 坂誥秀一「続　日本考古学拾遺－「大東亜共栄圏」の考古学」『立正大学文学部研究紀要』1995 年、第 11 号、pp.1-16.東京国立博物館『アンコールの美術』1998 年。藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱』めこん、2007, 最終章。
[21]横山正幸「日仏印文化交換に就て」『日仏文化』新 9 号、1944 年、pp.329-339.日仏会館。

百万の住民を統治している実績には学ぶべき点のあることを指摘する。さらに「純粋日本文化の卓越性を示すのみならず」、外国から吸収した要素をも提示することが「日本文化の融和力をも理解せしむる上に必要」との見地に立ち、国粋一本槍の文化工作には疑念を呈している。「展覧会と言ふものは時に利用範囲が極限せられる」との観察は、1941 年の仏印巡回展への婉曲な批判であろうが、先に引用した小松清の見解との親和性はすでに明らかだろう。さらに横山は「現在仏印に於ける映画配給状態は誠に憫然たるものである」との見解も披瀝している。小松清もまた、『仏印への途』(昭和 16 年 12 月)に纏めた現地報告で、この横山とも平仄のあった批評を、検閲ぎりぎり、よりあけっぴろげに展開していた。小松が槍玉にあげたのは、タイにおける文化工作の実態だった。「泰には現在アメリカ映画と支那映画しかない。その国に向けてわが文化工作の実践家たちは『大阪夏の陣』を持って行った。非常識もここまでくれば批判の言葉を奪つてしまふ。（中略）わが名士、富豪や学者やお役人の片手間による独善的な、お綺麗事の宣伝遊戯も一掃されるべき運命にあるといはねばなるまい」[22]。

横山は立場上もあってか、すでに公的な決定事項である学術交流を、最優先の事業として取り上げ、「医科大学、法科大学、遠東仏蘭西学院、パスツール研究所等学術上高等の学究施設」に触れている。だがこうしたフランス植民地の高等学術施設にばかり注目する為政者的・行政官的な視点に対しては、小松はよりはっきりとした保留意見を表明している。

「印度支那大学も、極東学院も、パストゥール研究所も立派である。アンコール・ワットの遺跡の保存も、仏印各地にある美術博物館も植民地道路も都市計画も立派である。フランス人が今までやつてきた数々の見事な文化事業にたいして私は決して賛美を惜しむものではない。けれども、そのために仏印のデルタ地帯の都市や農村ーことにトンキンのデリタ地帯ーの到たるところにうじようじよ群れなしてゐる住民の多数が疾病と貧しさと阿片のために蟲けら同然に生命をなくし、蟲けら同然の生活をしているのを眼の前にすると、いまあげたやうな立派な事業のことなどつい忘れがちになるのである」[23]。

---

[22]小松清『仏印への途』序、pp.9-13.
[23] 同上、「サイゴンの印象」『仏印への途』　p.84.

為政者の上からの視点には、住民への無意識の蔑視が巣くっていた。フランスで人格陶冶を遂げ、人民戦線に共感を覚えた小松にとって、日本の官尊民卑と、時局を口実としてそれを外地で増幅するかのような外交文化政策には、耐え難い嫌悪を催すほかなかったようだ。『仏印への途』は、検閲や処罰への懸念もあってか、文意が不鮮明な箇所や、削除ゆえか著者の意図が読み取れない行文の多いことは、後になって著者自ら告白するところだ。しかしそれでも、序文にはつぎのような忌憚なき言辞を読むことができる。「仏印には千八百万の安南民族がすんでゐる。その一部をしめてゐる指導的なインテリゲンチャが何を要求してゐるか、そしてその大多数である貧しい農民が現実的に何をのぞんでゐるか、このふたつの希ひを理解し、その希ひにそふところに対安南文化工作の意義が存する」。ここにはインテリ層政治家や外交官相手の工作しか眼中にない行政側とは、明確に一線を画した姿勢が見て取れる。この断固たる正論の前提として、小松はお高く留まった外務官僚を正面から批判し、加えて了見の狭い仲違いに現を抜かす民間人に対しても、こう釘を刺す。

「私のよくいふことだが、今日のやうなさし迫った時局にのぞんで、役人はすべからく従来の官僚臭や気位を一擲して、すすんで民間のエクスパートとの協力を求めるべきだ。今日の日本は、やれ軍だ、やれ官吏だ、やれ民間だといつたような《区別の意識》を持つてゐられるほど贅沢をいつてゐられる時代ではない。また民間の人たちも、つまらぬ対立や反発の意識、路傍人的批判を思ひきつて棄てるべきである」[24]。

1941 年、日泰文化会館の初代館長の任についたのは、外務省を退いていた柳澤建（1889-1953）だった。小松が批判する「文化工作の実践者」の現場責任監督である。柳澤は 1934 年に外務省文化事業部初代課長を拝命した人物であり、もっとわかりやすくいえば、国際文化振興会発足の立て役者にほかならない。その柳澤には『泰国と日本文化』(昭和 18 年 4 月刊)と題する著作があり、それによると柳澤の外務省退職(昭和 15 年 12 月 14 日付け)は、松岡洋右の外相就任によって断行された「世間周知の外交官の大量馘首」の巻き添えを食った「辞表提出」だったらしいことが判明する[25]。小松清は「アジアの花」と題するエッセイで、「皇軍進駐後」の南方アジア

[24] 同上、序、pp.9-10.
[25] 柳澤健『泰国と日本文化』不二書房、昭和 18 年 4 月 20 日発行、p.2.

に旅して「二人の現代日本の英雄を発見した」と書く。ひとりは「支那の夜」が退廃的だと日本側のお堅い筋からは批判されつつも大流行を見た、李香蘭であり、いまひとりは、国際連盟脱退で「世界の耳目をそばだたせた」松岡洋右元外相だったという[26]。「安南の愛国者やインテリゲンチャのラヂカルな分子の眼には、松岡さんは、たしかに東亜解放の預言者として、またその旗旆かざす英雄としてうつつてゐる」。松岡が民衆階層の出自であり、アメリカで苦学して大学を出た、といった経歴を耳にすると、かれらは賛嘆の情に眼をかがやかせた、という。松岡の「ポピュラリチ」に現地で接した小松は、その松岡から外務省を追われてタイ日本文化会館の館長に収まったフランス通の文化行政官、柳澤健の運営方針には、どうやらしっくりとこないものを感じていた様子である。小松に直接、柳沢に関する言及は見えないが、小松の行文の陰には、柳沢に代表されるようなエリートコースに乗った外交官の「高慢」な姿勢に対する、鬱屈した敵愾心、肌に合わぬ居心地悪さが漂ってくる。それは、けっして無根拠な推量ではない。

実際、小松清は、映画『大阪夏の陣』の南方興業の一件と並べて、吉田晴風一行の尺八使節団を揶揄し「ジャズが好きで夢中になってゐる向こうの人たちに、尺八の音がどうしてアッピールする魅力をもつことができようか」と悪態をついている[27]。タイのインテリに吉田晴風を聞かせるなど滑稽千万だというわけだ。この吉田晴風ほかの挺身派遣の申し出を喜んで受けたのは、ほかならぬ柳澤健であったが、こうした事業には外務省からは公的な出費や便宜供与はまかり成らぬ規則だった。このため結局、柳沢は個人名義で、後援者たる東京日日新聞の高石主筆宛に、私的に依頼状を認める羽目になった、との裏話を披露している[28]。元外務官僚ならではのお役所勤めの「苦心」談だが、これも私人たる小松清の立場からみれば、いかにも的外れで滑稽な「空騒ぎ」に映じたことだろう。相手方の求めるところから遊離した企画を批判して、小松は『仏印への途』の序文の最後にこう言い放っていた。「このやうな意識と目的をもたない企画は、すべて文化的ディレタンチズムであり、お祭り騒ぎであり、お道楽であり、つづまるところ時とかねの空費でしかない」[29]と。

---

[26] 小松清「アジアの花」『仏印への途』、p.94-96.
[27] 小松同上書、pp.12-13.
[28] 柳澤健　同上書、p.49. なお柳澤健の年譜は『インド洋の黄昏　柳澤健遺稿集』昭和 35 年、非売品。
[29] 小松同上書、p.13.

6. 日本敗戦後の仏越和平交渉への関与

こうした価値観を抱いていた小松清の本領が発揮されたのは、日本敗戦後から1946 年 5 月の日本への引き揚げのあいだ、より厳密にいえば、46 年 1 月 21 日から3 月 6 日までのこと、といえよう。この間の状況は、昭和 29 年になって刊行された『ヴェトナムの血』に詳しい[30]。小説仕立てだが、これには引き揚げの際、中国側官憲より写真や日記を含む一切の記録持ち出しが許可されなかったという事情があった、と小松は語る。物語中の会話の細部や心理描写については、もとより真偽を確認する術もないから、いまさら信憑性を疑っても始まるまい。物語の枠組みが概ね史実にそって構築されていることを確認すれば、本稿にさしあたり支障はない。事のはじめは作中で「アンドレ」と呼ばれるフランス軍の中尉、実際には後の駐日フランス大使、フランソワ・ミソフ François Missoffe 大尉(1919−2003)が、日本側に接近したことにある。依頼の内容は、ヴェトナム側とフランス側の和平のための外交交渉の下地を水面下でお膳立てする手伝いだった。事の性質からして、成就したあととなっては、もはや史実として歴史の表面には残らない任務である。先に触れた小牧近江が最初に亡命ロシア人商人ソロヴィエフの仲介でフランス側と接触をもったものらしく、主として小牧はヴェトナムの国民党（武鵬慶ほか）への説得にあたり、小松清はヴェトミン、大越党（阮海臣ほか）との交渉を担当した様子である。ヴェトナム側の諸派の利害を調整のうえ、フランス側はジャン・サントニー中佐 Jean Sainteny（1907−1978)、ヴィトナム側は臨時政府を樹立することとなるホー・チミン Hồ Chí Minh、胡 志明（1890?－1969）のあいだで、1946 年 3 月 6 日には停戦協定が結ばれることとなる。いわばこれで用済みとなった小松らは、その停戦協定2 ヶ月後に、ヴェトナムを離れることになる。すでに歴史が教えるとおり、この和平協定は、その直後にダルジャンリュー提督 D’Argenlieu がサイゴンに帰還し、46年末には第一次インドシナ戦争が勃発することで、水泡に帰す。その限りでは、サントニー自身が後年に回想する通り『失墜した平和の物語』でしかない[31]。

小説の中で志村晋作の名前を与えられたのが、小牧近江だが、彼は晩年の『ある現代史』に、その顛末の一部を綴り、国民党や大越党関係者を説得してホー・チミ

[30] 小松清『ヴェトナムの血』河出書房、昭和 29 年 7 月 25 日刊。
[31] Jean Sainteny, *Histoire d’une paix manquée*, *Indochine 1945-57*, Fayard, 1967.

ン派との連立を呑ませた小松の活動ぶりについて、小説中には見えない、次のような逸話を残している。

「小松清はよくやった、と思いました。［ヴェトナム側諸派の調整に］ラチがあかぬので、かれはストライキの組織にかかったのでした。それまで、ハノイに労働者のストライキなどなされたことはなかったのですが、彼は、主として電気産業の労働者たちに働きかけ、いっせいに交通機関を停止し、電気を消させることにしました。そうしたら、ハノイが経験したことのない闇の世界に化す。これが、だいぶ、国民党系や大越党系に圧力となって効いたようでした。たとえそれが噂だけでも…。私たちが積極的に動きだすと、やれフランスに買収されているとか、ホー・チミン側の肩をもちすぎているといわれ、右翼から強い非難を買い、人相書きをまわされたりして身辺の危険を感じるほどになりました」[32]。

いかにも軽妙な語り口の回想だが、「身の危険」は誇張ではない。小松の小説の末尾近くには、志村老人が国民党の放った刺客に襲われて負傷する場面があるが、これも事実に基づいている。実際には刺客ではなく、右翼の越南人とグルになった中国兵がどさくさにまぎれて強盗を働いたもの、と小牧は分析している。とはいえ、きわめて不安定な治安の下で、対立する党派間の説得工作に挺身する小松や小牧に、身の危険が迫ったのは事実だった。短刀の傷はあやうく手首の動脈を逸れたが、場合によっては命に関わる負傷だった。

7.「ホー・チミンに会うの記」

こうした工作に小松が関与できた背景には、ヴェトナム側の知識人たちとの密接な交友があった。とりわけファム・ゴクタック　潘玉拓、愛称《タック》Pham Ngoc Thach はサイゴンで小松と親しかった医師であり、「青年前峰」Thanh Nien Tien Phong を組織した人物として知られている。この私設民兵団は、その後ヴェトナム国軍の母体へと発展する。その手腕を買われたタックは、ホー新内閣において、

[32] 小牧近江『ある現代史』法政大学出版会、昭和 40 年 9 月刊、p.187.なお同時期の小松の活動については、那須国男「対東亜共栄圏下のベトナムー小松清をめぐってー」『思想の科学』1963 年 12 月号、pp.41-49 には、身近な観察者の視点から、1945 年 3 月 9 日に小松が指揮して刑務所を襲い、安南人政治犯を解放した件や、小牧と連携した難民救済事業など、『ヴェトナムの血』が触れていない事件に言及し、直情径行の小松の性格を証言している。

厚生大臣ならびに外交顧問の役割を担う。そして、このタックが小松とホー・チミンとの会見の立役者となったものらしい。

1945 年 11 月に実現した、小松とホー・チミンとの会見について、『ヴェトナムの血』には、以下のような記述が見られる。「彼には相手に信頼感と友情をもたせ、それがために相手が落ち着いて何でも肝にある考えをはなさせる、といふ天稟の才能があつた。そんな人間的魅力を具へてゐた」[33]。このような観察した小松には、しかしひとつの疑問があった。すなわち、世間ではこのホー・チミンはグエン・アイコクと同一人物だとされているが、それは本当なのか、という問いである。タックも含め、ホー・チミンの周囲の誰ひとりとして、パリ時代のグエン・アイコクを眼にして居たわけではない。それに加えて、グエン・アイコクは 10 年以上前に香港で結核のため死去したとの噂が流れていた。奇しくも、日本人の小松清が、パリ時代のグエン・アイコクと眼前のホー・チミンとを比較して、同一人物なのか否かを吟味できる、希有な目撃者だったことになる。小松は次のように述べる。

「パリ時代の阮（愛国）は確かに私よりかなり上背があつた。ところが私の眼の前に立つたホー主席は私より目立つて背が低かつた。それに性格的に言つて、まるで別人であつた。阮は、若くて烈しい性格の持ち主であり鋭く雄弁な論客であつた。いかにも年とともに円熟してきたといふ可能性はあつても、ホー主席の人柄をなしてゐる温厚篤実、理論家というより寧ろ現実主義的な実際家といつた面はあまりに違いすぎてゐた」[34]。

面会の折に、眼前で席に座ったホー・チミンは、きわめて学のある英語で語り始めたが、小松の対応ぶりにただちに流暢なフランス語に切り替え、英語とフランス語とを自在に操った。懇談はふたりきり水入らずで 3 時間あまりも続いたという。会見の 5 年後の 1950 年になってその様子を伝える小松の評論には、ことさら通説に楯突き、ホー主席はグエン・アイコクとは別人だと言い募り、センセイションを巻き起こそうなどという意図は感じられない。また政治的な意図やなんらかの思惑からそうした混乱を引き起こす必然性もない。とすれば事は純粋に、小松の心理的な不一致感に帰着するだろう。行文の途中で小松は「顔の横にぴんととび出た大きな

---

[33] 小松清「ホー・チミンに会うの記録」『朝日評論』1950 年 3 月号、p.53.

[34] 小松清「越南の志士たち」４頁、別文が「ホー・チミンに会うの記」『朝日評論』1950 年 3 月号、pp.46-53、さらに異文が『ヴェトナムの血』p.208 に見え、本引用はここから。

耳は私の記憶にはなかつた」、とも語る。だが、グエン・アイコクのフランス時代の写真やパスポートの肖像を見ても、同様に特徴のある耳が左右に飛び出ている。さらに、小松によれば、パリ時代のグエン・アイコクには漢文の素養は見られなかった、という。ところがホー主席との会見での小松の観察によれば、かれは明らかに縦書きでメモをとっており、漢字使用者であることは疑いない。また周知のように、獄中での詩作でもホー・チミンは漢詩を物している。「たしかにペンは上から下に、つまり垂直に動いている。ホー主席は、漢字でノートしているに違いない。欧文の横書きでないことは確かだ。ところが、阮愛国は、越南の五十以上の知識人なら必ずもつている漢学の素養を、若い時代から身につけていなかつた。阮愛国の追想は、このようなホー主席のささやかな動作にも、つきまとうのであつた」[35]。これも小松をして両者別人説を主張する根拠となさしめたものである。だが、ここでもまた、フランスで小松が会ったグエン・アイコクに漢字の素養がなかったとするのは、あくまで小松の限られた見聞から得た感触にすぎず、根拠は欠落したままだ。

小松の証言で、外面的にもっとも気になるのは身長の問題だろう。官邸に招かれた時の記述にはこうある。「相手の男は、落ち着いた足のはこびで、手をさしのべながら私の方に近寄ってきた。小さい。阮はもつと大きかつた。少なくとも自分よりは大きかつたのに、いま私の前にいる男は自分より小さい。阮ではない、と私は直覚した」[36]。とはいえ小松の身長は 162cm といわれており、ホー・チミンは 170cm を越える身長の持ち主だったという。とすればハノイでホー・チミンにあって、自分より背が低いと思った小松の認識のほうに、理由は不確かながら、なんらかの錯誤があったという推測もなりたつだろう。とはいえ、ここにはさらに不可解な事実が残る。仮に小松が眼前の政治指導者をパリ時代に親交のあった盟友と認識したならば、当然その話題が二人の会話に登場してもよかったはずである。なぜその話題は伏されたのか。双方がこの話題に触れることを忌避した事実、そしておそらくはホー・チミンの側が小松を既知の人物とは認知しなかった、という事実は、小松清の側の別人説を、間接的に補強する状況証拠とはいえるだろう。

くわえて、小松も推測するとおり、蒋介石がグエン・アイコクという名前を変えることを条件にホー・チミンに活動の自由を与えた、といった公式伝記の説明は、

---

[35] 小松清「ホー・チミンに会うの記録」同上　p.53.
[36] 小松清「ホー・チミンに会うの記」p.51.

それだけでは十分な説得力を持つものとは言い難い。わざわざ国民的英雄の名前を隠す理由も乏しければ、また抗日ゲリラ運動の末期にいたっても、まったくグエン・アイコクの名前が出てこなかったのも不自然だからだ[37]。むしろグエン・アイコクと同一人物である、という触れ込みが、民族の指導者にとって、凱旋将軍をも彷彿とさせる後光さす効能を発揮する―そのような環境は、日本の敗戦直後のこの時期を待ってようやく醸成されたものであり、頭角を現したホー・チミンの周囲がその時流に肖ったことだけは、疑いない事実だろう。

もとより小松の証言の信憑性に白黒をつけるのは無意味で無理な相談だろう。しかしそこには今なお解明できない謎が指し示されている。すなわち、ホー・チミンというひとりの卓越した政治家の生涯にあって、公式の伝記記録の記述では不分明な軌跡、辿りきれぬ欠落がなお残されている。そのことを、小松清の証言は、遠慮がちにではあるが、物語っている[38]。逆にいえば、なぜ阮愛国と胡志明とが同一人物でなければならないのか。その政治的要請にこそ、現代政治史の秘話、いまひとつの謎が宿っている、というべきだろう[39]。

---

[37] 小松清『ヴェトナムの血』pp.170-172.

[38] 小松清は「ホー・チミンに会うの記」p.47 では、ホー・チミンの前半生をグエン・アイコクの生涯に接ぎ木する解釈は、主としてソ連あるいは共産党筋のソースに由来すると判ずるほかない、と述べている。

[39] 小松清「マルロオの手紙」『新潮』1948 年 5 月号 pp.26-35 には、小松清とマルローとの文通に託して、小松のインドシナ滞在末期の状況を含む経緯が述べられている。アンドレ・マルローについては、そのスペイン内戦時の英雄談も含め、あたかも歴史の決定的瞬間に立ち会って、そのつど決定的な発言をしたかのごとくに語る著者の異様な自己顕示欲や政治的演出ぶりに、過度の誇張や史実の捏造を認め、これを指弾する研究も近年多く見られるようになってきた。マルローの感化をもろに受けた小松清にも同様の傾向のありうることを、当然、警戒すべきであろう。だが、むしろこの吟味からは、自己を飾らない反面、直言居士で、官僚的なせせこましさには我慢ならず、とかく世に容れられなかった小松と、個人主義のスタンドプレイを嫌う規律づくめの日本社会との相性の悪さが、かえって浮き彫りにされるように思われる。